

ロイック・ヴァカン著

貧困という監獄

グローバル化と刑罰国家の到来

アメリカでこの三〇年何が起こったのか？ 囚人の爆発的な増加である。その数は一九七五年には三十八万人まで減少していた。楽観的な雰囲気の中で監獄の終焉すら語られる。ところが、一〇年後に七十四万人、そして二〇世紀末には二〇〇万人をこえていく。

福祉国家から「刑罰国家」へ

——アメリカの変容の実態を二示す——

白石 嘉治



貧困という監獄
——アメリカ刑罰国家の到来を論ずる——

46判・203頁・2415円
新曜社
978-4-7885-1140-8

め、「講義後にはフルデューの自宅まで歩きながら熱心に議論を重ねるようになる」。だが、著者の名を知らしめたのは『身体と魂——シカゴゲット、ある見習いボクサーのエスノグラフィ——』（新曜社近刊）だろう。彼は留学先のシカゴ大学で黒人社会学者ウィリアム・ジュリス・ウィ

とをめざす。こうした著者の遍歴は、本書の構成にもあらわれている。すなわち第一部「貧しきは罰せよ」

そして第二部の「刑罰国家への誘惑」では、アメリカの貧困の人種主義的な実態が統計をふまえて手際よく示される。驚くべきことに一八歳から二九歳の黒人男性の三人に一人が法的な監視下に置かれているという。この「法と秩序」（ニクソンの表現である）による組織的なハラスメントのもとで、貧困を再生産するネオリベラルな刑罰国家の統治が可能となるのである。

（「基本所得」）の導入をはじめとした「生存」の無条件の保障である。労働市場の外部に監獄を設定し、資本が支配する賃労働を強いること。これが刑罰国家であるとするれば、われわれの未来は既存の賃労働をおりる方途の創出からはじまるはずである。本書の社会的な記述の峻厳さは、そう思い描くことの必然を告げている。秀逸な訳文とともに、新しい必読の武器が手にはいったのである。（森千香子・菊池恵介訳）（らしい・よしはる氏）上智大学ほか非常勤講師・フランス文学専攻

労働市場の規制緩和、社会保障制度の解体、等々。おなじみの資本の強化によって貧困が産み出され、警察と監獄の「コントロールの対象となる。福祉国家から「刑罰国家」へ——これが本書の示すアメリカの変容の実態、ないし新自由主義の本質であり、その趨勢はいまやイギリスを経由してヨーロッパにまでおよぶといふ。

りのしない経営学を学んだが、たまたま友人にフルデューの講義にさそわれて社会学にめざ

ルソンに出会い、さらにゲットーのボクシングジムに通いながら人種と貧困を内側から記述するこ

「ゼロ・トレランス」の「成功」が捏造され、貧者は厳重に取り締まるべき逸脱として浮上する。

★ロイック・ヴァカン（1960～）はフランス生まれ。現在、カリフォルニア大学バークレー校社会学部教授。シカゴ大学で博士号取得。著書に「リフレクシヴ・ソシオリジューへの招待」（フルデューとの共著）など。